

Jane Austen と Bath

オースティンの書簡から考える温泉地バースと鉱泉治療

宮野 佳¹⁾, 本田蘭子²⁾

1) 川崎医科大学自然科学

2) 広島大学教養教育

(令和6年11月11日受理)

Jane Austen and Bath

Kei MIYANO¹⁾, Ranko HONDA²⁾

1) *Department of Natural Sciences, Kawasaki Medical School*

2) *Liberal Arts Education, Hiroshima University*

(Accepted on November 11, 2024)

抄 録

ジェイン・オースティン (1775-1817) は19世紀初頭のイギリスを代表する作家で、『高慢と偏見』など主に6作品を残し、41歳でこの世を去った。彼女の手による161通の私信は、その人柄や生きた時代を捉える上で、貴重な資料となっている。例えば、医療的な観点でそれらの書簡に目を通してみると、アヘンチンキの使用や水銀を用いた治療が言及されたり、温泉地バースや鉱泉治療の話題が約20年にわたる一連の手紙の中にあちこちしたためられたりしている。バースといえは、歴史的な医療施設があることでも有名である。そこで本稿では、2025年に生誕250周年を迎えるジェイン・オースティンについて振り返りながら、彼女の書簡をひもときながら、バースの歴史や鉱泉治療についても言及し、オースティンの生きた時代に思いを馳せる機会にしたいと考える。

キーワード：ジェイン・オースティン、バース、ジェイン・オースティンの書簡、鉱泉治療、温泉病院

Abstract

Jane Austen (1775-1817) was a leading British writer of the early 19th century, who left behind six major works, including *Pride and Prejudice*. Her 161 surviving letters serve as an invaluable resource that aid in gauging her personality and the prevalent socio-cultural context in which she lived. When examined from a medical perspective, references to the use of laudanum and mercury treatments can be found. In addition, the spa town of Bath and the mineral treatments available there are also described. Likewise, the city is also famous for its historic medical establishment. The 250th birth anniversary of Jane Austen is coming up in 2025. This article reflects on Jane Austen and her letters, while also detailing the history of Bath and its mineral treatments.

Key words: Jane Austen, Bath, Jane Austen's letters, the mineral treatments, the Mineral Water Hospital

はじめに

ジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) は19世紀初頭のイギリスを代表する作家で、『高慢と偏見』など主に6作品を残し、41歳でこの世を去った。2025年にオースティン生誕250周年を控えるイギリス各地では、様々なイベントが企画されるなど、その人気は健在である。

オースティンの残した161通の書簡は、等身大の彼女の普段の姿を知る上で、貴重な資料であるばかりでなく、当時の社会的な慣習や思想など実相を知る手がかりでもある。例えば、医療的な観点でそれらの書簡に目を通してみると、アヘンチンキの使用や水銀による治療が目にとまり、興味深い。中でも、温泉地バースや鉱泉治療の話題が約20年にわたる一連の手紙の中のあちこちにわたって記されていることに気づく。

バースといえば、ローマ時代からの遺構をはじめ美しい街並みを誇るイギリスきっての観光地の一つだが、それだけではなく、“the Min” (正式名称: The Royal National Hospital for Rheumatic Diseases) として親しまれる18世紀前半に設立された歴史的な医療施設があることでも知られる。そこで本稿では、ジェイン・オースティンについて振り返りながら、彼女の書簡をひもときながら、バースの歴史や鉱泉治療についても言及し、オースティンの生きた時代に思いを馳せる機会にしたいと考える。

Jane Austen その評価

およそ作家にとって、シェイクスピアに譬えられることは最上の賛辞だろうが、ジェイン・オースティンは、まさにこの言葉のある英文学

者に言わしめた。日本では『怪談』の作者として知られる小泉八雲 (ラフカディオ・ハーン) にである。東京帝国大学で英文学の教鞭を取っていた八雲は「彼女はけっして二流の作家ではない。シェイクスピアにも比すべき存在である。…実際、人物たちの劇的な真実といきいきしたようすは、シェイクスピア的と言っていいくらいだ」¹⁾と称賛を隠していない。

八雲の後任を東京帝国大学で担った夏目漱石もまた「Jane Austen は写実の泰斗なり。平凡にして活躍せる文学を草して技神に入るの点に於いて、優に鬚眉の大家を凌ぐ。余云ふ。Austen を賞翫する能はざるものは遂に写実の妙味を解し能はざるものなりと。…しかも写実の泰斗として百代に君臨するに足る…」²⁾との絶賛ぶりである。

オースティン自身はといえば、自分の作品を1816年12月16-17日の書簡の中で「小さな象牙」と表現している。“…the little bit (two Inches wide) of Ivory on which I work with so fine a Brush, as produces little effect after much labour”³⁾確かに彼女の小説は、19世紀初頭のイギリスのアップパーミドルクラスというオースティン自身の生きた世界観から一歩も踏み出すことはなく、例えば、革命も戦争も貧困も主題に上ることは決してない。

当時ヨーロッパはナポレオンの台頭で大混乱し、ジェインの兄たちも海軍の士官として前線に戦っていたことを考えれば、少し不可思議なほどに、オースティンの描くものは常に、安定し調和のとれた小さなコミュニティでのことである。

しかし、精緻な人間観察に基づいた人物描写がオースティンの豊かな感性でなされると

き、それは社会や世間を冷静に批評する鋭さとウィットを併せ持ち、いつしかイギリス的なユーモアや価値観も体現することになっている。それでいて、なぜか普遍的な魅力を放つオースティン作品は、現在でも変わらぬ人気を誇っている。

Jane Austen⁴⁾

ジェイン・オースティンは1775年12月16日イギリスのハンプシャーで誕生した。父のGeorge Austen (1731-1805) はステイーヴントン (Steventon) の牧師で、夫婦にとってジェインは6番目の子どもで次女だった。アッパーミドルクラスのオースティン家は、広大な土地や屋敷を所有している裕福な親戚筋などと比べると見劣りはしたが、質素な中にもそれなりの交際範囲を持ち、子どもたちには教養と愛情が与えられていた。家族仲は良好で、生涯において支え合っている。

子どもの頃のジェインについては、あまりよく知られていない。彼女を知る手がかりとして残されている書簡は、最も古いもので、1796年1月9-10日と記されており、ジェインはすでに20歳くらいになっている。その後、書簡は1817年5月28-29日? (未投函) と記されているものまで、161通が入手可能だが、この日付は同年7月18日にジェインが亡くなったことを考えると、死の約1か月半前のものである。時にジェインは41歳、アジソン病説が最もよく知られている。

Jane Austen's Letters

一般に当時の書簡は、離れている家族や友人と繋がるほとんど唯一の通信手段で、費用を受け取り手が支払うシステムになっていたことや、紙自体が現在よりも貴重なこともあり、紙面には情報がたくさん書き込まれるのが通例だった。ジェインの書簡は、主に姉キャサンド

ラに宛てたものだが、家族の様子や舞踏会での出来事はもちろんのこと、娘らしくドレスの流行や帽子の飾りについて、また日々の食事の内容など、話題は日常に関する多岐にわたり、飾らない調子でしたためられている。

今回はその中でも、医療的な観点で目を向けてみると、例えば1798年10月27-28日には、旅疲れしている母親について、“… She bore her Journey… the sight of Mr. Lyford, who recommended her to take 1 2 drops of Laudanum when she went to Bed, as a Composer, which she accordingly did. …” と述べており、鎮静剤としてアヘンチンキが処方されたことがわかる。この時の書簡には、さらに Mr. Lyford がタンポポ茶 (Dandelion Tea : レシピは Basingstoke で入手したらしい) を虚弱体質だった母親に勧めている様子も垣間見られる。

その他、耳に何らかの症状があるときにはアーモンド油 (cotton moistened with oil of sweet almonds, 1808年10月1-2日)、頭部に水が溜まった症状には水銀剤 (the Mercury, 1817年3月23-25日) による治療が施されている。また、1800年11月20-21日には、“… James & Mrs. Augusta alternately read Dr. Jenner's pamphlet on the cow pox, & I bestowed my company by turns on all. …” とあり、興味深い。

ジェンナー (Edward Jenner, 1749-1823) による種痘についての初めての著作 (*Inquiry into the Variolae vaccinae known as the Cow Pox*) は、1798年に出版されているが、1800年に第2版が王室に献上されたことで、この頃、世間の注目を集めた時期だった。当時オースティン家でもそうした話題が取り上げられていたことが窺われる。

ところで、書簡に登場する Mr. Lyford という人物は、オースティン家のいわゆるかかりつ

け医で外科医 (surgeon) である。Dr. ではなく Mr. が付されているが、イギリスでは1858年の Medical Act によって、初めて内科医や外科医がより厳格に定められるようになる以前は、基本的には physician にのみ Dr. が付されていた。オースティン家の Mr. Lyford は、一角の人物で、家族ぐるみの付き合いをしており、ジェインの書簡には頻繁にその名前が挙がる。

Jane Austen と Bath

書簡でのバースや鉱泉治療に関する箇所を拾い上げてみると、1799年、裕福な兄エドワードが痛風治療のためバースへ訪れる際に同行したジェインが姉キャサンドラへ送った書簡では、次のように述べている。〈Sunday 2 Jun 1799 @ Bath〉“…He drinks at the Hetling Pump, is to bathe tomorrow, & try Electricity on Tuesday; - he proposed the latter himself to Dr Fellowes, who made no objection to it, but I fancy we are all unanimous in expecting no advantage from it…”

“He drinks “とあるのは、いわゆる飲泉のことで、バースにはパンブルームと呼ばれる飲泉ができる部屋があり、そこで社交するのが嗜みとなっていた。また、この書簡からは電気を使った治療なども行われていたことがわかる。

当時のバースは上流階級のファッショナブルな保養地として国内でも随一の人気を誇っていた。ジェインも家族の療養に同行して訪れたことがあるだけでなく、オースティン家は父親が退職した1801年から5年程、バースで居を構えていた。彼女の作品の中でも、『ノーサンガー・アビー』『説き伏せられて』はバースを舞台にしている。

次の引用はオースティン家がバースで家探しをしている時の書簡からのもので、やはり飲泉に言及している。〈Tuesday 5-Wednesday 6

May 1801@ Bath〉“…When my Uncle went to take his second glass of water, I walked with him, & in our morning’s circuit we looked at two Houses in Green Park Buildings, one of which pleased me very well…”

他にも友人がバースで療養している時に姉キャサンドラに送った書簡には〈Saturday 5- Tuesday 8 March 1814〉“…Her Mother does not get better, & Dr Parry talks of her beginning the Waters again; this will be keeping them longer in Bath…” とあり、期待するような回復が見られない場合には、医師の判断で滞在が延期されたこともわかる。

次の引用は、姉キャサンドラが親類の療養に付き添ってバース近郊の温泉地チェルテナムへ同行している際、ジェインから送った書簡からのものである。〈Sunday 8- Monday 9 September 1816〉“…I am very glad you find so much to be satisfied with at Cheltenham. While the Waters agree, every thing else trifling. …” この約3か月前の同年6月には、ジェイン自身も体調不良を訴えて、同じチェルテナムで療養していた。その時のジェインの症状には疲労感や体力の消耗などがあったが、これは恐らく約1年後の彼女の死の前兆でもあった。

この書簡の「鉱泉さえ合えば、他のことは些細なこと」という言葉に、当時は温泉地療養が単なる転地療養ではなく、その効果が期待されたことが窺われるが、オースティンの生涯を通して縁が深かった温泉地バースや鉱泉治療とはどのようなものだったのだろうか。

温泉地 Bath⁵⁾

バースはイギリス南西部サマーセット州に位置し、エイヴォン川が街の中心を流れる温泉地である。ローマ時代に造られた「ローマン・バス」の遺構で知られるが、伝説によればその歴



画像1 大英博物館のHP (https://www.britishmuseum.org/collection/object/P_1881-0611-85) (2024.9.26) に掲載

The King's and Queen's baths, looking West, 1675. Thomas Johnson
17世紀後半のバースの様子が垣間見られる。多くが着衣のまま入浴し、思い思いに楽しんでいく様子が伝わる。右上の枠線内には、ブラダッド王の伝説が挿入されている。

史はもっと古く、一説では紀元前9世紀の古代ブリテンのブラダッド王子にまで遡る。王子は重度のハンセン病にかかり、宮廷から追放される形で放浪した後、たどり着いたエイヴォン川沿いの小さな村で、豚を飼いながら生活していた。ある日、蒸気を発する沼地を発見した王子は、豚たちがその沼地に身を浸し皮膚が劇的に綺麗になったのを見て、自らもその沼地につかることで病を癒した。その後、宮廷へ振り返り、王位を継承した王子は、バースを大切にしてお貯水池を作らせたという。

ブラダッド王伝説の真偽は怪しいが、これが流布された18世紀までの史実を簡潔に振り返ると、バースはまずローマ人による大々的な開発に幕を開けたが、中世のころには一時衰退した。これはスパの歴史を概説した A van Tubergen らによれば、476年のローマ帝国崩壊以降、入浴の習慣自体が廃れていった時期で、続くルネッサンス期も依然として、浴場は

むしろ皮膚疾患の源であるかのように考えられていたらしい¹⁰⁾。

この頃のバースでも、1597年エリザベス1世が疾患のある貧しい者たちに無料でバースの入浴施設を開放したこと（エリザベス救貧法）を考えると、そうした負のイメージにつながることは想像に難くない。それでもバースは17世紀後半には、チャールズ2世やジェームズ2世妃が滞在するなど、その薬効性への期待は忘れ去られず、いつしか著名な医師なども集まるようになっていった。

そして18世紀、バースは上流階級のファッションナブルな保養地として花の時代を迎える。Richard “Beau” Nash (1674-1762) などの有志によって秩序ある社交場としての地位を確立し、建築家 John Wood (1704-1754) によって美しい街並みに整えられると、バースは裕福なものたちがこぞって集まる華やかな場所へと変貌していった。その過程では、先述したブラ

ダッド王の伝説が流布されたり、1742年に開院した the Royal Mineral Water Hospital が、次の章で述べるような戦略的な役割を期待されたりする中で、鉱泉の効能が印象付けられていた。

the Mineral Water Hospital の設立¹¹⁾

現在でも地元の人たちが親しみを込めて the Min と呼ぶ医療施設は、John Wood によって1737年に着工され1742年に完成した。多少複雑な名称（通称）の変遷を経ているが、鉱泉を治療に用いることを端的に表している the Royal Mineral Water Hospital が最もよく知られていることから、現在でも the Min という愛称で呼ばれている。1935年以降からの正式名称は The Royal National Hospital for Rheumatic Diseases で、建物自体は2019年に役割を終える一方、その機能は The Royal United Hospital (RUH) 内の新施設に移転される形で継続している。

どのような経緯で the Min は設立されたのだろうか。バースの鉱泉の治験について詳述した Heywood によると⁷⁾、18世紀前半にはバースに限らず Winchester, Exeter, Bristol などでも相次いで病院が設立され、その数は1760年までに16を数えた。背景には、病院を施療院として捉える従来の見方に、より経済的で現実的な視点が加えられたことがあるようだ。

具体的には、労働者の一人当たりの死亡は社会的に200ポンドの損失になることと比較すると、入院患者の治療には3.12ポンドで済むという経済的な合理性に加えて、患者は回復して仕事に復帰できる一方で、医師は無料で医療を提供するという高邁な行為から、社会的に gentlemen としての地位を得ることができた。病院や入院施設は、従来の完全な慈善事業としてというよりもむしろ、施される側にも施す側にも利点があることが重要になってきた時代

だったのである。

バースの場合もその例に漏れない。バースで病院の構想が検討され始めたのは1716年に遡り、そのころ、先述したエリザベス救貧法は1714年に廃止されたていたものの、貧しい病める者たちは依然としてバースへ押し寄せていた。結果として、満足な治療を受けられないことも多く、街の治安や秩序も乱れがちになっていた。

このような状況を看過できない街の有志たちは、病院を設立し、本当に助けを必要としている人たちにケアを行うことを提案したが、当初、こうした通例的な慈善活動としての資金集めは難航する。そこで、病院の設立が、医師たちにとって治験の機会となることに注意が向けられるようになった。

病院でいわゆる“治験データ”が集められれば、バースの薬効性に対する説得力のあるエビデンスになる。これは医師たちにとって有益であるだけでなく、バースを他の保養地と差別化し、その繁栄を期待する街の有力者たちにとっても非常に好都合なことだった。こうして高まった病院設立の機運から、the Min はついに1737年着工に至ったのである。

the Mineral Water Hospital での入院¹²⁾

治験の場としての機能も期待されたこの病院は、入院するには一定の条件が課され、出身地や経済状況、症状、年齢、職業などがあらかじめ審査されたことに加えて、入院後も治療やその結果が記録されることになった。

Heywood はこうした取り組みを、“possibly the first extensive trial of any medical therapy” として注目し、中でも慢性的な鉛中毒（当時は一般的な疾患だった）に対する統計を示している⁷⁾。ここでは詳述は省くが、一部紹介すると、1762年から1767年まで、鉛中毒による麻痺のある患者281人が入院し、そのうち

92.5%にあたる259人に治癒または改善が見られた。より長期的には、1760年から1879年までの120年間では、総入院数49102人の中で、鉛中毒による麻痺の疑いで入院した患者は3377人、その内1533人の治癒を含む、3162人に改善が見られたという。

良好な結果が示されているが、どのような入院生活が送られていたのだろうか。Heywoodによれば⁷⁾、患者たちには新鮮で十分な量の食事はもちろん、自家製のビールが提供されることもあり（院外では飲酒禁止）、場合によっては下剤などの薬が処方されることもあった。入浴は1回1時間以上で週3回、専用のホットバスで行われ、患部に鉱泉をかけるという行為も行われていたが、1790年代にはより温度の低い入浴の方が効果的だと指摘した医師もいた。1830年には、病院専用の入浴施設は35度に設定され、飲泉については一日1～1.5英ポイント（1英ポイント=0.568…ℓ）を分けて摂取することになっていた。

バースでの飲泉

バースに滞在する場合、飲泉は最もポピュラーな行為で、入院患者だけでなく、バースを訪れる者にとっての社交の一部でもあった。バースの著名な医師の一人である Thomas Guidott (1637-1706) は、1676年の著作の中で *Of the Virtues of the Bath-water taken inwardly* という章を設け、“And first, in General, I conceive it very proper in all Diseases or Symptoms, that require cooling, cleansing, opening, or gentle Evacuation…”と言及した後、二つ目の利点としては食欲増進を挙げている¹³⁾。

また1780年の *The New Bath Guide* によれば、パンブルームと呼ばれる飲泉のできる部屋（1704年に造られ、その後拡張や縮小の経緯を経た）は、朝7時から10時に多くの人を訪れ、

その間8時からバンドによる生演奏の演出がされていた¹⁴⁾。あるいは、1815年の *A guide to all the watering and sea-bathing places* の記述では、空腹時の朝6時～10時と正午ごろ、一日の総量としては1～3ポイントの飲泉が勧められていた¹⁵⁾。そのほか、裕福な者たちは個人で医師に相談の上、飲泉の量や時間を決めていたようである。

裕福な兄エドワードの療養に同行してバースを訪れていたジェインの次の書簡を見ると、一般にはその効果が現れるのには時間がかかると考えられていたようだ。〈Tuesday 11 June 1799 @Bath〉“… Edward has been pretty well for this last Week, & as the Waters have never *disagreed* with him in any respect, We are inclined to hope that he will derive advantage from them in the end; - everybody encourages us in this expectation, for they all say that the effect of the Waters cannot be negative, & many are the instances in which their benefit is felt afterwards more than on the spot. …”

Dr. Oliver

ところで現在の the Min には、その歴史を物語る1枚の画布が展示されている（画像2）。18世紀にバースで活躍した画家 William Hoare (1707-1792) によって1742年に描かれた “Dr. Oliver and Mr. Peirce the First Physician and Surgeon Examining Patients Afflicted with Paralysis, Rheumatism and Leprosy” である¹⁶⁾。

この絵から、バースに救いを求めてやってきた人々の主な症状として、麻痺（鉛中毒を含む）、リウマチ、ハンセン病（Heywood によれば皮膚症状は一般にハンセン病だと考えられていたらしい⁷⁾）があることがわかるが、その他、ジェインの兄のように痛風や飲泉関連での記述で散見された消化系の症状も多かったのだ



画像 2

ろうと想像できる。

さらに、右手に座る Dr. Oliver という名前に聞き覚えのある方も多いかもしれない。Dr. William Oliver (1695-1764) は the Min の初代院長も務めたバースを代表する医師で、その名前は現在もバースオリバーというビスケットとして健在である他、バース名物の菓子バースバンズの生みの親とも言われている。

ジェインの書簡(1801年1月3-5日)には、そのバースバンズに言及される箇所があり、彼女のチャーミングさが垣間見られるので、引用しておく。“I do not know how to give up the idea of our both going to Paragon in May, ...& tho' to be sure the keep of two will be more than one, I will endeavour to make the difference less by disordering my Stomach with Bath bunnis; ...” この書簡は姉キャサンドラと一緒にパラゴン(バースにある地名)に行きたいジェインが、バースバンズを食べて胃を悪くすることで、自分の食費はかからないようにすることをほのめかしている。実はバースバンズは Dr. Oliver が患者の消化のた

めに開発したと言われているだけに、彼女の皮肉めいたユーモアのセンスが光るところである。

鉱泉の効果は本当にあったのか？

現代の感覚からすれば、鉱泉の効果は過剰に評価されていたように思うが、それ以外の有効な治療法や医薬品が存在していない当時としては、相対的に重要だったのかもしれない。例えば、奨励されていた飲泉についても、清潔な飲料水を手に入れることが容易なことではなく、特に都市化が進むにつれてロンドンのような人々が密集する場所では、感染症などの原因となる深刻な問題になっていた。その点バースでは、1650年以降は a clean supply was provided which came directly from the spring が可能となっており⁷⁾、安心して飲めたミネラルを含む鉱泉は、貴重な存在でもあったのだろう。

また Bath Medical Museum のサイトの “Did the Bath Waters Really Cure Patients?” のコラムによれば、プライベートバスができるまで

は、入浴は屋外で行われていた。したがって入浴と日光（紫外線）にあたることによる恩恵があったのだろうと指摘されている。当時は、鉛中毒も一般的な疾患で、それらはある種の麻痺や痛風にも関係していたが、入浴することで改善が見られることも多かったらしい。

屋外での入浴は、紫外線暴露によるビタミンDの生成に寄与し、そこにプラセボ的な効果も加わることで、バースの鉱泉の有用性が広く認識されるに至ったのだろう。とはいっても現在では“the hospital hydrotherapy department in its new site is content to use heated tap water”との一文が印象的ではある¹⁷⁾。

他方、歴史的な意義は小さくない。バースには多くの医師や富裕層が集まり、様々な思惑が交差しながらも、実際に病院が設立され運営されることで、救われた人も多かったことだろう。1742年の William Hoare の絵に改めて目を向ければ、患者らの風貌から貧しい者が多かったことや、子どもや女性を含む様々な人を受け入れていたことがわかる。

そうした患者が普段の生活では決して接点を持ってない高名な医師 (Dr. Oliver と Mr. Peirce) が実際に診察にあたっていたことも興味深い。病院設立の背景には、先述したような経済的な合理性や施す側にとってのインセンティブが重要視されていたのも事実ではあるものの、開かれた医療への平等なアクセスという点において大きな進歩を遂げたのだろう。

Jane Austen's last illness

最後に、ジェイン・オースティンの晩年に視点を戻すと、1816年あたりから彼女は体調を崩しがちになり、体力が落ちて外出もままならず、背中や膝に痛みがあり、熱が出て、顔色や皮膚症状にも変化があった。症状には起伏があったが、1817年3月中旬から悪化が目立ち、5月下旬、療養のため医療施設が整っている

Winchester へ赴く。一時は回復傾向も見られたものの、7月18日にこの世を去った。

彼女の死因については、死後150年程経過した1964年7月になって初めて *British Medical Journal* にて Zachary Cope (1881-1974) がアジソン病説を提唱¹⁸⁾ したが、この Cope の説を見た別の医師 F. A. Bevan によって、同じ *British Medical Journal* の次号 (1964年8月) でホジキンリンパ腫が提起¹⁹⁾ されている。いずれも、ジェイン存命中には特定されていない疾患である。その後も死因を巡っては議論が継続されており、結核に関連したものだだったとの指摘²⁰⁾ や、最近のものでは全身性エリテマトーデス²¹⁾ との見解も示されている。

ジェイン自身は症状について、書簡を読む限りでは、胆汁 (Bile) を主原因とする様々な不調に加えて、関節の痛みはリウマチ、時には単なる疲れのように捉えようとしているが、ほぼ一貫して、楽観的で深刻な様子をあまり見せず、ユーモラスで小気味のいい調子で語っている。

最後に、彼女の症状、当時の医療環境、彼女の人物などが読み取れる一例として、死の2か月ほど前の書簡の一つ引用しておく。既に楽観的な様子とはいかないが、死地となった Winchester へ赴く直前のもので、ここで言及される Mr. Lyford は、かかりつけの Mr. Lyford の甥で、Winchester での名医とされていた。長文になるので、拙訳を付しておく。

〈Thursday 22 May 1817〉 @Chawton

“Your kind letter my dearest Anne found me in bed, for inspite of my hopes & promises when I wrote to you I have since been very ill indeed. …My head was always clear & I had scarcely any pain; my chief sufferings were from feverish nights, weakness & Languor. …Our nearest very good, is at Winchester, where there is a Hospital & capital Surgeons,

& one of them attended me, & his applications gradually removed the Evil. The consequence is, that instead of going to Town to put myself into the hands of some Physician as I should otherwise have done, I am going to Winchester instead, for some weeks to see what Mr. Lyford can do farther towards re-establishing me in tolerable health. … Believe me, I was interested in all you wrote, though with all the Egotism of an Invalid I write only of myself. (家族がとてもよくしてくれていることを述べる) In short, if I live to be an old Woman I must expect to wish I had died now, blessed in the tenderness of such a Family, …—You would have held the memory of your friend Jane too in tender regret I am sure. …”

アン様、あなたの素敵なお手紙を私はベッドでお受け取りいたしました。この前私がお手紙を差し上げた時は、次は良くなっていると願い、お約束までしたのに、実際にはその後とても具合が悪くなってしまったの。…意識は常に明瞭で、あまり痛みもありません。私の主な症状は夜の発熱と、体力の消耗や疲労感です。…私たちに近くて良いのは、ウィンチェスターで、そこには病院もありますし、素晴らしいお医者様方もいらっしゃいますし、その内のお一人の先生が診てくださって、彼の手当てのおかげで徐々に楽になっています。ですので、場合によってはロンドンでどなたか内科医の先生に診てもらおうことも考えたのですが、その代わりにウィンチェスターへ行って、数週間はライフオード先生が私を、本調子とはいかなくても、さらによくしてくださるようにお願いしてみます。…お手紙であなたが書いてくださっていたこと、本当にとっても面白く拝見いたしましたのよ、病人らしく利己的にここまで自分のことばかり述べてきましたけれど。(家族がとて

もよくしてくれていることを述べる)つまり、もし私が老婆になるまで生きながらえたとしても、今のうちに死んでしまっておけばと思うに違いないわ、このような家族の優しさに包まれている今のうちに、…あなただって、今なら友人ジェインの思い出を優しい気持ちで受け止めてくださることでしょうに…

おわりに

オースティン生誕から来年(2025年)で250周年を迎えようとしている。彼女の書簡を契機に、改めてその時代を振り返ってみると、例えばジェインは自分の症状の原因が胆汁(Bile)にあると考えているが、それはまだ19世紀初頭という時代が、いわゆる四体液説が根強い時期にあることを思い起こさせる。その意味で、当時は古代ギリシャのヒポクラテスやその後のローマのガレノスなどの影響を直接的に受けた知の体系の中にありながら、一方でジェンナーの種痘がリアルタイムで開発された時代でもあり、新旧織り交ぜた施術や知識が、人々の生活の中で実際に行われたり、広められたりしていたのだろう。

また、当時のパースの病院設立の背景や医療の一端なども垣間見てきた。医療というものがより開かれて平等なものへと変化していく過程で、病院単位の大規模な治験データが求められたことは興味深い。医学や医療の分野は決して独立したものではなく、その当時の経済観念や倫理観などとも結びつきながら、発展してきたとも言えるだろう。

最後に、ジェインの晩年の書簡では特に、病状が悪化し不安で苦しい中でも、明るく振る舞う様子に、人としての強さや優しさが表れていると感じる。オースティンという一人の作家の書簡と、パースの病院や鉱泉治療の変遷などを重ね合わせると、そうした歴史的な背景や事象がよりリアリティのあるものとして立ち現れて

くる。

謝 辞

豊かな学識で研究活動全般をご指導くださる川崎医科大学自然科学教室の西松伸一郎 教授に深謝する。

註・引用文献

- 1) 野中涼・野中恵子訳『ラフカディオ・ハーン 著作集 第十二巻』恒文社, 1982年, pp. 112-118
- 2) 夏目漱石『文学論』大倉書店, 1917年, p. 504
- 3) Jane Austen, Deirdre Le Faye ed.: *Jane Austen's Letters*. Oxford Univ Pr (New York). 1995
本稿で引用したオースティンの書簡については、すべて本書からのものである。引用したそれぞれの書簡には日付を付したので、ページ数の表記は割愛した。なお、引用箇所には、古い表記や誤字なども含まれるが、すべて原文ママとしている。
- 4) 本稿でのジェイン・オースティンの略歴等に関しては、一般的によく知られている事実に加えて3)を改めて精査したほか、Caroline Austen: *Aunt Jane Austen, A Memoir*, Jane Austen Society. 1991なども参照している。
- 5) 本稿のバースの歴史については、主に以下6)～8)を参照した。
- 6) 蛭川久康『バースの肖像：イギリス十八世紀社交風俗事情』研究社, 1990年
- 7) Heywood, A. (1990) A trial of the Bath waters: the treatment of lead poisoning. *Med Hist Suppl.* 10, 82-101.
- 8) BATH MEDICAL MUSEUM の HP (<https://bathmedicalmuseum.org/>) (2024.9.26)
- 9) Pierce Egan. *Walks Through Bath, Describing Everything Worthy of Interest*. 1819. 電子書籍として収録 (<https://archive.org/details/walksthroughbat00egangoog>) (2024.9.26)
- 10) van Tubergen A. and van der Linden S. (2002) A brief history of spa therapy. *Ann Rheum Dis.* 61, 273-275
- 11) “the Min” の現在の愛称や建物については、主に8)を参照している。設立の経緯や背景については主に7)を参照している。
- 12) 本章の入院に関する情報や治験データは7)を参照している。なお、8)のサイトでは、当時の病院が再現されており、病室の様子や使われていた医療器具などが紹介されている。
- 13) Guidott T. *A Discourse of Bathe and the Hot Waters There*. 1676. Oxford Text Archive 収録 (<https://ota.bodleian.ox.ac.uk/repository/xmlui/bitstream/handle/20.500.12024/A42300/A42300.html?sequence=5>) (2024.9.26)
- 14) No authors (1762) *The New Bath Guide*. British Library HP 収録 (The new Bath guide : Anstey, Christopher, 1724-1805 : Free Download, Borrow, and Streaming : Internet Archive) (2024.9.26)
- 15) John Feltham. *A Guide to all the Watering and Sea-Bathing Places*. 1815. 電子書籍として収録 (https://books.google.co.jp/books?id=NQ4HAAAAQAAJ&pg=PA331&redir_esc=y#v=onepage&q&f=false) (2024.9.26)
- 16) BATH MEDICAL MUSEUM の HP (<https://bathmedicalmuseum.org/>) (2024.9.26) 掲載の写真を Art and Design Manager for the Royal United Hospital Foundation Trust の許可を得て転載した。
- 17) BATH MEDICAL MUSEUM の HP (<https://bathmedicalmuseum.org/>) (2024.9.26)
- 18) Cope Z. (1964) Jane Austen's last illness. *British Medical Journal*, 2, 182-183.
- 19) Bevan F. A. (1964) Letter to ed. *British Medical Journal* 384.
- 20) White K. G. (2009) Jane Austen and Addison's disease: an unconvincing diagnosis. *Medical*

Humanities. 35, 98-100.

- 21) Sanders M., Elizabeth D., and Graham M. (2021) 'Black and white and every wrong colour': The medical history of Jane Austen and the possibility of systemic lupus erythematosus. *Lupus*. 30, 549-553

その他, Upfal, A. (2005) JaneAusten's lifelong health problems and final illness: New evidence points to a fatal Hodgkin's disease and excludes the widely accepted Addison's. *Medical Humanities*. 31, 3-11. では, ジェインの書簡などを精査して, 彼女が感染症などにかかりやすく体が弱かったことを指摘しつつ, ホジキンリンパ腫を支持している。